

課題名：「実験社会」における社会実験化の手法と影響に関する検討

代表者：見上 公一（慶應義塾大学 理工学部 専任講師）

参画機関：東京大学 未来ビジョン研究センター, 北海道大学 大学院理学研究院, 京都大学 人文科学研究所



課題概要

本企画調査は、科学・技術と社会との調和を図る手法として実施される「社会実験」に着目し、期待される効果およびその適切な実施のための条件について基本的な考え方を提示することを目標とする。社会実験は現代社会で広く実践されている。科学技術イノベーション実現のためのプロセスとしてこの社会実験を実施する場合には、対象となる新規の科学や技術を暫定的な形で社会に組み込むことになる。このことによって多様なステークホルダーの持つ価値観が顕在化され、異なる価値観を調整するための対話の機会を創出することに繋げることができると考えられる。しかし、暫定的とはいえ新規の科学・技術を社会に組み込むことで生じる影響は看過できない。科学技術社会論における議論を中心に社会実験に関する考え方を整理するとともに、これまでに実施されてきた社会実験の事例について考察を行うことで、社会への影響を限定的なものとしながらステークホルダー間の建設的な対話を実現するための実験デザインを検討する。

ポイント

社会実験はこれまでも広く活用されてきた手法であり、特に技術やサービスの開発者とユーザーあるいはクライアントとの間でその詳細について調整を行うことを目的として用いられてきた。具体的なユーザーやクライアントの存在が明確であるからこそ、そのニーズや価値観を反映させた形で技術やサービスの開発が実現されてきたと考えられる。しかし、実際には提供される技術やサービスはユーザーやクライアントとして一般的に認識される集団を超えて、広く社会に影響を与えると考えられる。だとするならば、その調整のための社会実験の実践もより包括的になる必要があるはずである。近年では行政が関与することによって社会実験の規模を拡大する試みなどもなされているが、その実施には多くの資源が必要となることから科学技術イノベーションのための実践として一般化することは難しい。本課題では、限られた資源を用いて社会との対話を実現するためのきっかけをどのように作ることができるかについての具体的な提案を目指している。